
満開 - 心時間の金時計 -

風野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満開 - 心時間の金時計 -

【Nコード】

N2885C

【作者名】

風野

【あらすじ】

これはね、自分の気持ちなの。時を止めた金時計と、咲くことを忘れた桜。時間は動き出す。いつの日か、必ず。

「和也あつ！いつまで寝てるの！？早く起きなさい！」

今朝もけたたましい姉の怒鳴り声から始まる、鶴見家。

自室のベッドでぬくぬくと丸まっているのは、二人暮らしの鶴見家の一人、鶴見 和也だ。

十七歳、高校二年生。高校は中途半端な進学校で、成績は中の下。授業の半分を寝て過ごし、確実に起きているのは休憩の十分間のみという、どこに居てもおかしくなさそうな問題児である。

両親を亡くし、今は姉と二人暮らしだ。

「和也！いい加減にしろ！この馬鹿！」

短気な姉は早くも痺れを切らし、和也の部屋に飛び込んで、彼がしがみついている布団を剥ぎ取り、床に叩き落した。

「いてえ！何すんだ、美里香！」

「美里香あ？何よそれ！お姉さまに向かって！」
「くっ」

拳を振り上げる、ノーマイクの鬼婆……もとい、彼の姉に、和也は口を閉ざし、自分だけに聞こえる声で呟いた。

「何がお姉さまだ。SM女王じゃあるまいし。二十代のオバサンの癖しやがって、くそっ」

上目遣いに見上げると、そのオバサン、美里香には、ばっちりと

聞こえていたらしく、彼女は、和也を見下ろし、ふっ、と冷たい笑みを浮かべた。

「何言ってるの？従兄弟から見たら、あんたもオジサンじゃない。しかも、あんたもあと三年すりゃ、そのオバサン・オジサン年齢に突入よ？一緒ねえ？ふふふ」

「なんでそんな事ばかり頭にあるんだ。可笑しいじゃねえか、他は全然の癪に……しかも、地獄耳だし。なんであの声が聞こえるんだ……」

ブツクサと言いながら、美里香を見ると、先程と同じ冷たい笑みをたたえ、こちらを見下ろしていた。

「そんなこと言ったらね、仕事やめるわよ？良いの？飢え死に人生歩みたい？」

「すみません、ごめんなさい。何もございません、文句ありません」

「よろしい」

おほほほほ、と高笑いする真似をして、美里香は、あ、と抜けた声を出した。

「大変！私もう行かなくなっちゃー！」

「！げ！やつべ！俺もだ！」

「ったく、あんたが起きないからあー！」

ばたばたと姉が慌しく出て行くのを見て、和也は溜息をついた。

「お互い様じゃん……」

ぼそりと呟いた一言に、返ってきたのは、玄関が乱暴に閉まる、どんっ、という音だった。

和也は床から起き上がり、急いで制服に着替えると、鞆を引っつかんだ。

台所を覗くと、剥いた林檎が一切れと弁当箱。

「林檎一切れとか……成長期の若者には少なすぎるんじゃないですか、お姉さまよ」

呆れたように呟きながらも、その林檎を口に咥え、弁当を鞆に詰め、玄関へ走る。スニーカーをろくに履かぬままに飛び出し、自転車へ飛び乗ると、和也はそのまま自転車で走り出した。

「お？」

目に一瞬入ってきた、枯れた桜の木。

もう数年、咲いた覚えはない。流石に春になっても夏になっても、いつになっても葉っぱ一枚ないのは、いささか寂しいものだ。あるのは枝だけである。

しかし、一応生きているらしい。手入れをすれば良いそうだが、生憎その時間も無く、早数年、という有様だ。

「もう一回くらい、咲かねえかね」

咲くも何も季節外れだよ、と自分に突っ込み、和也は全速力で自転車をこいでいった。

・・・

落ちていく。

すべてが。

先程まで自分が乗っていた車も。
そこに乗っていた筈の、人間も。

炎に包まれ、黒い煙に包まれ、落ちていくトラック。

爆風でふわりと浮き上がった体。

赤く、熱い液体が、宙を舞う。

此方を見つめる、親の顔。
うつすらと笑ったその顔。

次第に、その姿は遠くなり、伸ばした手は、虚しく空気を掴むの
み。

大きな、衝撃。

熱風が、頬を掠めていく。

すべてが、落ちていく。

・・・

和也は、叫びかけて必死にこらえ、顔を上げた。

(ヤベ、また寝てた……しかも数学じゃねえかよ)

すぐに冷静な頭が戻ってくる。

数学担当の鈴木が、黒板に色々書いて、それを説明している。いつもの授業風景だった。

ふら、と気を遠くしかけ、和也は自分の頬をつねった。

数学くらい、起きておいた方が後に良い。それくらいは分かっているつもりだ。

ふと、夢を思い出し、和也は窓の外を見た。晴天だ。雲ひとつ無い、真っ青の空が広がっている。

そんな空を見つめながら、和也は眉を寄せた。

まだ、生々しく残っているのだ。自分の記憶には。両親を亡くし、姉と二人だけになってしまった事故が。

そういえば、あの日も、今日のように青く晴れわたっていた。まるで自分達を嘲笑うかのように。

制服の黒いズボンをあさると、両親の形見である金色の懐中時計がすぐに見つかる。

長い鎖がついていて、安物の金メッキで塗られた、どこにでも売っているような代物だ。

しかも、時計は動いていないと来ている。

いや……動かしていない、のだ。

そう、正しくは。

母の言葉に従って、あの事故以来、一度も、
龍頭りゅうずをおした覚えは無い。

(そう……まだ、動かせない……)

和也は、黒板のほうへ顔を向けた。皆の顔が、眠気で歪んでいるのが分かった。数学教師、鈴木は、その睡魔を呼ぶ声のため、安眠教師、とまで呼ばれている男だ。

そんなクラスの様子を見ながら、和也は時計から手を放し、ノートを取り始めた。

頭には、その内容はさっぱり、入ってこなかったが。

・・・

和也の母親は、少々風変わりな女性だった。

というより、この一家四人全員が風変わりとも言えるが、まあ、それは置いておくとして、この母親は、考えが他の人とは、多少違っていたのである。

他人と意見が違うのは当たり前かもしれないが、しかし、それでも、彼女の行動には謎が多かった。夫でさえ、全て理解していたのだろうか。

和也のもつ、あの金時計も、そうだ。

あの時計は、和也が幼稚園児の時からずっと、持たされていたものだった。

そして、母はいつも言っていた。

『これはね、自分の気持ちなの』

と。

『すごくすごく、困ったりして、気持ちに整理がつかなくなったりすること、あるじゃない？』

金時計の鎖を和也の首にかけ、彼の頭を優しく撫でながら。

いつも、いつも。

『そんなときはね、思い切って止めちゃえば良いのよ。自分の気持ちを』

ふふ、と悪戯っぽい笑顔を浮かべ、例えばよ、と人差し指を立て、話し出す。

金時計が一秒一秒、正確に動くのを確かめるかのように、静かに目を閉じ、語りかけるように。

『例えば、私が死んじゃったとするじゃない？和也はすごく悲しくて、全然整理がつかないの。そういう時は、自分の気が済むまで、考えれば良いの。そしてね』

母の優しい声が好きだった。

だから、母の温かな手に自分の手を重ね、一緒によく歩いたものだ。

母の言う言葉に真剣に耳を傾けながら、しかし、その内容の半分も理解できないままに。

母はそれを知っていたのだろうか。

和也が、その言葉を理解しようと努力していたことを。

だから、口癖のように、毎日毎日、同じことを繰り返して話していたのだろうか。

まるで、和也の頭に、一語一語を刷り込むように。忘れないように。今、その意味は分からなくても、後に、理解してもらえるまで待つわ、と語りかけるように。

優しく、ゆっくりと、歩くペースに合わせてながら、一つ一つの言葉に重みを持たせて。

それでも、笑みは絶やさぬ声で。

『自分に整理がいたら、動かすの　　いーい？和也。これは普通の時計なんかじゃないのよ。自分の気持ち。自分の精神きせちが生きていた時間を表すの。だからね、和也。この時計は、ごまかしが利かないのよ』

にっこりと笑う母親の姿は、今でも、鮮明に覚えている。そして、その言葉も。

でも。

『　　和也っ！美里香っ！』

自分の子供を、車が崖下へと落ちて行く直前に突き飛ばし、命を救った母親。

燃え盛る火と、黒い煙の立ち込める車内に残された。二人のかわりに。

父親は、そのとき既に事切れていた。

大型トラックとの正面衝突

生きているほうが、可笑しか

った。

血を流すその姿に、和也も美里香も言葉を無くしていた。
そんな状況下の判断。

落ちていくその姿を、和也は今も覚えている。

母親は、うつすらと微笑んでいた。

その口の動きも、忘れていない。

『 貴方達だけでも、助かって』

声は聞こえなかったが、確かに、和也は、母親がそう言っているのだと確信した。

その直後に襲った熱風と衝撃。

母が助かる見込みはゼロだった。

燃え盛る車を見下ろし、和也は、呆然とする意識の中、この金時計の時を、初めて、止めた。

あの時から。

『 自分に整理がいたら、動かすの』

時計は、動いていない。

・・・

昼休み。

親友である純と昼飯を突付く、いつもの時間帯だった。

「お前、今日、どうしたんだよ」
「は？」

いきなりの一言に、和也は目を瞬かせた。

「三時間も一度も机に突っ伏さずに起きてるところ、俺は初めて見た！」

「失礼な」

「安眠教師の授業は流石に寝てたけど、それでも、最後の三十分、お前ずっと起きてただろ？教師のほうじゃ驚いてたぜ」

「……マジで？」
「マジで。だって、俺、見たもん。安眠教師の奴が、お前の方見たとき、一瞬、固まったト」

爆笑する純を恨めしげに見つめ、和也はオカズの玉子焼きを口に放り込んだ。

卵の殻が、じゃり、と音を立てた。

「なんだ、どうした？変な顔してさ」

「別に……玉子焼きに本来入るべきでないものが、俺の口に現れただけ」

「……卵の殻？」

「なんで分かるんだ……」

額を抑えながら、その塊を飲み込んだ。

「ほら、俺たち付き合い長いじゃん？」

「あっそ」

一年も経つてねえよ、と呆れながらに呟くと、純は、にじし、と笑って、焼きそばパンに齧り付いた。

その時だった。

「鶴見！鶴見和也！居るかっ！？」

大声で叫びながら、安眠教師こと数学の鈴木が、乱暴に扉を開けた。

嫌な予感が、和也の背中をひやりと駆け抜けた。

鈴木は、慌てた様子で、和也のもとに駆け寄ると、早口で囁くように言った。

「鶴見、お姉さんが事故に巻き込まれたそうだ。今、病院から電話があつて」

純の手から、パンがポロリと落ちた。

和也の目が、これ以上無いと言つほどに見開いて、そして、次の瞬間には、立ち上がっていた。

体中から、血の気が引いていくのが分かった。視界がぐらりと歪み、足下がふらつく。今にもがくがく、と震え出しそうな程、寒かった。

「職員室に来なさい」

「はい」

悲鳴を上げる胸とは違い、冷静な声が出た。

教室を出て、廊下を歩き、階段を登る。そんな、いつもの行動さえ、煩わしかった。

職員室までの道のりが、ここまで遠いと思ったのは、初めてだ。全てが、まるでスロウモードにされたかのように、もどかしい程ゆっくりに感じた。

あの、事故のときのように。

職員室に入ると、教師全員の顔がこちらを向いた。上を向いたまま放置された古い型の、黒くてデカイ受話器が、ゆっくりと手渡されるが、なかなか手が出なかった。

そんな、冗談だろ？

そんな気持ちで一杯だった。

まだ、夢を見てるだけだ。そうだよ、美里香が事故だなんて信じられない。

今更ながら、そんな気持ちが湧き上がってきた。
どくん、どくん、と心臓が早鐘を打つ。

くらっ、と今にも倒れてしまいそうなほどだ。

「鶴見」

鈴木が声をかけてきて、一気に現実に引き戻されたような感覚が襲った。

鈴木の手には、相変わらず、黒光りするデカイ受話器。

夢じゃないんだ。

じわり、と視界が霞んだ。

震える手で、受話器を受け取り、耳に当てた。

「かわりました……鶴見です」

受話機の向こう側の慌しさが、直に感じられた。
ざわざわと人の話す声、走る慌しい音。

全部知っている。

あの時、自分はその中心に立っていたのだから。

『鶴見 和也くんですか？』

「はい」

『お姉さん……鶴見 美里香さんが、電車の脱線事故に巻き込まれたんだ』

医者の声が遠く霞んで聞こえた。

「生きて……」

『ああ、生きている。でも、重傷だ。今から緊急の手術が』

あとの言葉は、ほとんど頭には入ってこなかった。
頭が熱かった。

脳が溶けるのではないかと思うほどに。

考えることが多すぎて、ぐちゃぐちゃで、何も考えられなかった。病院の場所を言われ、電話を切った頃には、もう、何がなんだか分からなかった。

「鶴見、大丈夫か」

「

「病院に連れて行こう。来なさい」

「は、い……」

ふらつく足取りで、鈴木の後を追った。

何もかも、もう、視界には入ってこなかった。

乗ったはずの鈴木の子の形も色も、病院までの道のりも、すべて真っ黒に塗りつぶされて、頭に、入ってこなかった。

・・・

病院につくと、そこはあの時と同じだった。

たくさんの怪我人が運び込まれ、軽傷者の手当ては、ロビー帯を使って慌しく行われ、看護師達が駆け回り、被害者達の必死の訴えがあたりを支配する。

記憶が混同する。

今が過去になり、過去が今になる。今が遠くなる。過去と今が同時に目の前に再生される。

重傷者を運ぶ担架が次々に運び込まれ、その中には、全身火傷で覆われ、元の顔が分からないような人もいた。和也と同じように呼ばれた被害者の家族達が、そこを走り抜けていく。目当ての人物の名を呼びながら。

それは、まるで戦場の真ん中にある病院。被害者が次々に来るため、人手も医療器具も足りない。呻き声があたりを支配する、地獄絵図。

あの時も、今も。

そう感じたのは、同じ。

「
」

そんな、と口から漏れた、呻くような一言。

和也は、必死に耳を押さえ、その場から逃げるように走り出した。思い出したくない事故を、必死で押さえ込むように。

ロビーから離れると、そこには沈黙だけが広がっていた。手術室だ。

幾つかの部屋はすべて、手術中のランプが光っていた。

そして、その部屋の前に設置された椅子に、被害者の家族らしき人達が、神妙な顔つきで、黙って座っている。

息を殺し、気持ちを押さえ込むような厳しい顔つきで。

看護師が一人通るたびに、ぱつ、と立ち上がり、患者の様子は、と聴く。他の担当である看護師は、分からない、と足早にその人から離れ、その人は、再び椅子に戻って、黙り込む。

その繰り返しだ。

「
もしかして」

そんな周りの様子を黙って観察しながらも、意識がほとんど無い状態で、呆然と立ち尽くす和也に、後ろから声がかかった。

「鶴見さんの……家族の方？ 弟さんの……」

看護師が一人、そこに立っていた。

「美里香さんの手術室は、一番奥です」
「分かりました……」

案内しましょうか、と言われたが、断った。
落ち着かなければならない。

吐きたくなる威圧感に負けない為に。

硬く閉ざされた扉の向こうで、姉は一体、どんな姿で手術を受けているのだろう。

意識がないかもしれない。骨が折れてしまっているのかもしれない。内臓が潰れているかもしれない。どれほど重傷なのか、そこまです。医者話を聞いていなかった。いや、もし聞いていたとしても、この状況下で、冷静に考える事が出来る自信は無かった。嫌な方向に、考えてしまう。そんなわけがないじゃないか！と信じる事が出来ない。信じなくてはいけないのに。信じなくては。そうだ。あの時のように。

「和也、聞いて。私はね、あんたの最大の味方よ。家族とか姉とか血の繋がりとか、そんなのすっ飛ばしても、私は和也の味方だから。だから、あんたは黙ってあたしを信じてなさい」

（姉ちゃん）

両親が死んで、引き取り手がいなかった自分達。

成人していた姉がいたからこそ、今、こうして生きていられる。大学をやめ、就職し、高校受験を悩んでいた和也に、受験を進めた姉。

彼女までいなくなってしまうたら、自分は一体、どこに行けばいい？

(死ぬなよ)

家族が二人だけになってしまっても、彼女は強かった。

『 和也！ほら、起きな！いつまでも寝てんじゃないわ！！お母さんとお父さんに顔向け出来ない人生なんて、私が許さないわよ！』

その笑顔が、泣きはらした赤い目での笑顔が、自分を立ち上げさせたのだ。立たなければならぬと、思わせたのだ。彼女が居なければ、今、自分がどうなっているか、わからない。

そんな姉が居なくなるなんてことは、考えられなかった。

家の枯れた桜を見て、来年は咲かせてこの下で花見をする、と意気込んでいた。

(桜、咲かせるんだろう？花見するんだろう？)

今朝、別れたとき、あんなに元気だったじゃないか。

和也は、ただ俯いて、沈黙の支配する廊下に、ただ、佇むことしか出来なかった。

ぱっ、と手術中の明かりが消えた。

いったい、どれくらいの時間が経ったのだろう。重い腰を上げ、扉を見つめていると、暫くして、医者が姿を見せた。

汗の滲む青い服。

目があった。

「姉ちゃんは」

自分の声が震えていることに、気付いた。

医者は、少し微笑んで、和也の肩に手を置いた。

「手術は一応、成功したよ」

「！」

「まだ麻酔の効果で、眠ってはいるが、大丈夫。内臓器官に骨が刺さって危険な状態だったが……一命は取り留めた」

「じゃ、じゃあ」

「あとは、彼女の体力の問題だ。二時間位したら、目を覚ますと思っよ」

がらがら、と音がして、姉を乗せたストレッチャーが自分の横をすり抜けていった。

その後をゆつくりと、ついていきながら、和也は心底安堵した。

あの姉が、体力勝負に負けるはずが無い。

そう信じながら。

・・・

『そっか、姉ちゃん無事だったか!』

ケータイの向こうで、純の弾んだ声がした。

「ああ、なんとか」

『良かったなー。あ、じゃあ、あとで家に鞆届けといてやるよ。今日に限って宿題多いからな。覚悟しとけよ』

「マジで? 明日、休もうかなあ」

冗談交じりの言葉に、純が笑って言った。

『助かったんなら来なきゃダメだろ、やっぱりさー!。ほら、しかも、明日から人権学習とか言って調べ学習始まるじゃん? 来なきゃヤバイぜ』

「お前、嫌な事ばっか教えてくれるのな……」

『ホントの事だし。ほら、俺、友達思いだろオ』

けらけら、と派手に笑う声。

それに混じって、電車が来ることを知らせる放送が聞こえてきた。

『おっと、ヤバイ。電車来ちまった。んじゃ、また後でな!』

「おっ」

ぶちっ、と乱暴に切られた。

ケータイを閉じ、にっ、と笑う。

今更ながら、姉の無事を実感できた。そんな気がした。

病室に入ると、機械の規則正しい音が、心臓が正しく動いていることを知らせてくれる。

と、美里香の目蓋が、ピクリと動いた。

「うん……」

小さな呻き声と共に、ゆっくりとそれが開き、黒い双眸が覗いた。

「うー……ん……?」

徐々に焦点があい、そして、その目が、和也を捉えた。

「和也?」

「おう」

美里香は、暫く沈黙して、辺りを見回していた。

そして、自分の状況　　ベッドに寝かされ、各種機具に繋がれた自分の体を見て、不意に、うわっ、と一声呟いた。

「私、事故って」

「うん」

「　　っはー……死ぬかと思ったわぁー」

「死にかけてココに運び込まれたんだよ」

「む。そうだったのか」

「……今、目を覚ましたトコなのに、なんでそんなに元気なんだ」

「あら、私はいつでも元気よ」

にっこりと笑って、そして、不意に黙った。

そして。

「ごめんね。心配かけたわね」

と囁くように言った。

「まさか、二度も、こんな命拾いするとは思わなかったわ。あの時は、死ぬと思ったもの」

また、今度は小さく笑った。

「死ななかつたな」

「がっかり？」

「まさか。俺、心配で……」

「なあに？泣いてるの？全く、和也は泣き虫ね」

そんなこと無い、と首を振って、和也は椅子に腰掛けた。

顔が熱い。

嬉しさで 実は、少し、泣いた。

「ねえ、和也」

「うん？」

目元を擦って、和也は顔を上げた。

「私さ、夢の中で、あの桜を見たのよ」

「あのつて……家の？」

「そう。満開の桜でさ お父さんと、お母さんと、私と、あんたとで、お花見してた。ずっと昔の」

懐かしそうに目を細めた美里香の目は、少し、潤んでいた。

「思えばさ、あの桜が咲かなくなったのって、あの事故があった、次の年からだったんだよね」

「そう……だったな」

「私……私達がいつまでも、あの事故のこと引きずっているから、桜も気を使つてさ、咲くに咲けないんじゃないかなって思ったんだ」

ふふ、と笑つて、美里香は目元を拭つた。

「もう、何年も前だよな」

「ああ」

「私達、少し、止まりすぎたかもしれないね」

「……」

「お母さん、あのとき、言つてたよね。貴方達だけでも助かつて、つてさ。きつと、そう言いたかつたんだよね。でもさ、それって、ただ助かるだけじゃなかつたんだよね。助かつて、確り生きていけて事だつたんだよね。そういうこと、私達、聞き流してた。きつと」

美里香は、静かに微笑んだ。

その顔は　　母の笑顔に、そっくりだった。

すうすう、と美里香の寝息が規則正しく響いている。

その寝顔を見ながら、和也は、ゆっくりとズボンのポケットから、あの金時計を取り出した。

「　　そうだな、姉ちゃん。俺達、時間を止めすぎたかもしれない」

ピクリとも動いていない秒針。

あのときから、一度も。

『自分に整理がいたら、動かすの』

母の言葉が、頭に響いた。

「母さん、もう、良いよな……」

ぼそりと吐いて、金時計の龍頭を、ゆっくりと押した。

かちっ。

重い音が部屋に響いた。

そして、暫くの間をあけて、秒針は、ゆっくりと動き出した。

ちっ、ちっ、ちっ　。

部屋に、その音は響きだした。

あの時から止まっていたものが。

自分の　時間きまぢ　が。

和也は、ゆっくりと立ち上がり、その金時計をベッド脇の棚にのせて、背を向けた。

それが、過去を過去とした彼の、彼なりの答えだった。

その暫く後。

美里香は、ゆっくりと目をあけた。

ぼんやりした目で辺りを見回し、そして、あの金時計を見つけた。

(くれ……)

和也の金時計。

あのときから、ずっと止まったままだった、あの。

(和也……)

手を伸ばして、とったその金時計は、しっかりと、時を刻んでいた。

止まることなく、規則正しいリズムで。

「 「

美里香は、その金時計を額に押し当てた。

まるで、その一秒一秒のリズムを、自分にも刻みつけるように。

「ありがとう……和也

」

ぼろ、と涙が頬を伝った。

美里香は、その涙を抑えようとせず、ただ、時計を額に押し当てて、そのリズムを、聴いていた。

・・・

三カ月後。 四月。

春麗 ハルリ

な季節に、美里香は退院した。

後遺症もなく、ひどい傷は大体治った。歩くことは、もう自分ひとりでできる。

「ったく、和也は。一人で帰って来い、なんて！」

迎えに来たつていいじゃない、とぶつぶつ言いながらも、彼女は歩いて帰路についていた。

ものすごく歩きたい気分だったのだ。

それに実は、家から病院までは、案外近かったりする。和也の学校から病院まではかなり遠いのだが。

「それにしても、ああ、懐かしや我が家！ やつと帰れるなんて幸せ！」

通行人たちが訝しげな目を向けるのにも構わず、美里香はさつきから独り言をかなりデカイ声で言いまくっていた。

病院内では、おしとやかなお嬢さんで通す、と無駄な意地を張り、本当にやり遂げた結果、かなりの間、デカイ声というのを我慢してきた、その反動だろう。

と、近所のオバサンが、美里香ちゃん、と声をかけてきた。

「おばさん！」

「まーすっかり元気になってー！」

「ええ、おかげさまで。お見舞い、ありがとうございました」
「いいのよー近所のよしみじゃない」

ぼんぼん、と肩をたたいて、オバサンは笑った。

「でも、本当にびっくりしたわ。美里香ちゃんが、大怪我なんて言うから！でも、もうすっかり大丈夫ね。リハビリの成果かしら」
「ええ！頑張りましたから　　あ、そうだ、おばさん、私がない間、和也のこと、どうもありがとうございました」

このオバサンに、和也は暫くお世話になっていたのだ、ということとを思い出し、ペこり、と頭を下げると、オバサンは、ふふっ、と笑って首を振った。

「いいのよ、別に。和也君、とっても良い子だったわ。お手伝いもしてくれたし、こっちのほうがかつちやっただけ……それにねえ、私、感動しちゃったのよ」

「　　へ？」

ぱっ、と手を組み、オバサンは、うんうん、と頷いた。

「今時あんな優しい子も少ないと思うの」

「な、何が　　ですか？」

すると、オバサンは意味有りげに笑って、まあまあ、と言った。

「行ってからのお楽しみよ！きつとびっくりするわ、美里香ちゃん！じゃあね、和也君に、またお手伝いに来て頂戴ね、って伝えておいてね！」

「　　は、はあ？」

手を振って去っていったオバサンを見送り、美里香は呆然としていたが、直ぐにまた歩き出した。

次の角を曲がれば、直ぐに、その答えは分かるだろう、と思ったのだ。家は直ぐなのだから。

やや早足で角を曲がった美里香は 暫く、そこに立ち尽くした。

「うそ……」

夢を見ているのか、と思った。でも、違う。夢ではない。何故なら、頬をつねってみても、痛いからだ。

「スゴイ……」

呆然としていた美里香は、はっ、として、我が家に駆け寄った。

和也が、そこに居た。
にっ、と笑って。

「か、和也！」

「なんだよ、ただいま、が先だろ、姉ちゃん」

「た、ただいま！」

「おう、お帰り」

なんともちぐはぐな挨拶を済ませると、和也と美里香の目は、すっ、とそれに向かった。

「和也……」

「頑張ったんだぜ？」

そこには、桜があった。

満開の、綺麗な、薄桃色の花びらをつけた、桜が。

「純の　　友達の親父に頼んで、貰ってきたんだ」

若い桜だ。

まだ細く、背も低い　　しかしその分、生命を感じさせる、
生き生きとした桜。

「んで、そのついでに」

へへっ、と笑って、和也は言った。

「そっちの桜も、診てもらったんだよ」

あの、枯れていた桜が。

「なんとか虫が住み着いてて、栄養取られてたんだってさ。それと
ったら、このとおり」

「　　」

咲いていた。

「ホントは、満開のトコ見せたかったんだけど。予定より、姉ちゃ
ん、退院が早かったからさあ」

そう。満開とは言えない。

そして、たくさんの花が咲いているわけでもない。
でも。

「でもさ、綺麗だろ？」

綺麗、だった。そう、本当に。

美里香の目が潤み、彼女が何か言いかけたところで、和也は、ちつちつ、と人差し指を振って、にやり、と笑った。

「おっと、姉ちゃんは、まだ感想言っちゃダメだぜ。満開になったら、花見するんだから。そんときに聞かせてくれよ。感謝の言葉をさー!」

「　　　つたく、あんたは。調子良いんだから!」

ばしつ、と和也の背中を叩くと、美里香はゆっくりと、家に入っていた。そのあとを、和也も嬉しそうについていく。

若い桜と、美しく命の灯火をあげなおした桜は、二つ並んで、二人を見送った。

姉弟と、二本の桜は、この日、再び歩み始めた。

歩めなかった数年分の時を、取り戻し、更に前へと進むために。

迷うことなく、規則正しいリズムと共に。

(後書き)

こんにちは、風野です。満開・心時間の金時計、読了ありがとうございました。

この作品は、高校1年生のときのもの。文化祭という昔なつかしいイベントの際、文化祭特別号、と銘打って部活で「Rebirth」をテーマに書いたものです。高校生になって初のテーマ小説ってことでかなり意気込んだ思い出があります……。テーマ、って難しいですね、本当に……。そして、締め切りという存在にどれだけ苦しめられたやら……。それでも、愛情と心意気(?)だけは詰め込んでいた筈の作品ですので、楽しんでいただければ幸いですw
感想・評価、お待ちしております
よろしく願います!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2885c/>

満開 - 心時間の金時計 -

2010年12月9日08時17分発行